平成 30 年度 事前復興フォーラム

学生が考える宇和海沿岸域の
小さな事前復興プラン　　講評

【講評者】
東京大学　羽藤英二 教授
東京大学　井本佐保里 助教
愛媛大学　松村暢彦 教授
愛媛大学　全　邦釘 准教授

羽藤：　東京大学，愛媛大学の皆さんどうもお疲れさまでした。ここ宇和島で，事前復興の学生さんが考えた取り組みの発表に対して，地元の方々がどういう感想をお持ちになられたというのが今の学生さんにとっては一番知りたいところだと思いますし，ぜひ忌憚のない意見を頂けたらと思っております。55 分くらいまでには終わるように言われていますので 45 分ぐらいになりましたら，少しフロアのほうにもご意見を求めて，学生さんに答えてもらえばと思っています。まずは，先生方からどういった感想を持ったのかということと，具体的なことで 1 つ 2 つご質問を投げていただければと思います。じゃあまず, 井本先生からお願いしてもよろしいですか。

井本：　皆様発表お疲れ様でした。私は東京大学でスタジオのほうを半年間やっていたのですが，今日の発表を聞いて，大学の最終発表よりもさらにブラッシュアップして皆様に，地元の方に聞いてもらえたと思いました。どの班についてもひとつずつ自治体を選んで，提案しているわけですけども，一つ自治体の中にもいろいろな地区があって，山側の地区であるとか沿岸の地区，それから山間部の地区があったり，市街地があったり，といったことをうまくとらえながら，提案できていたことがよかったのではないかなと思います。

拠点であるとか地域の資源を見つけるといったところがスタジオでやっていて一番苦労していたことだったので，そのあたりどの班も見つけられていたのではないかなと思います。　今日改めて発表を聞いていると，伊方班と愛南班については 2 つ以上の地区をもっと組み合わせることで，その地区が一致団結していくことであるとか，避難をより有効に促すということができるようなそういった提案になっていたことが特徴的かなと思いました。　一方，八幡浜班と宇和島班については両方とも低地の市街地であるということで，市街地で浸水区域のところで復興していかないといけないといった条件の中で，どういったことが可能かという点に取り組んでいたかと思います。　西予班については外部の人がどういった風に取れ組んでいくかというような点に重点を置いて考えたかなと思います。

そこで，具体的に質問させていただきたいのですけど，特に八幡浜班と宇和島班の低地部での提案についてお聞きしたいのですが, 低地部で住んでいる，住み続けていかないといけないという条件の中で，両班とも商店街という共通地域の資源ととらえて，それから復興の拠点としていくといったことを提案されていたと思います。そういった低地部を使い続けていくというには地域全体を大胆に，道路の付け替えであるとか，大規模施設の移転など大規模な改造を行ったうえで商店街再生というのをやっていくんですけども，具体的に，商店街の再生ということは被災した時にどういう風に寄与できるのかということをもう少し詳しくお聞きしたいということと，それは低地部，生業の場で活用していくということが提示されていたんですけども，低地部は住まいとしてどういった風に再生していけるのかということについて教えていただけたらなと思います。

羽藤：　じゃあまず，八幡浜班から

八幡浜班：　まず八幡浜の商店街について説明させていただきます。商店街は現在，シャッター商店街になってしまっていますが，そこを再びシャッターを開けていって，日常の中で人々が集まっていくような場所にしたいと思います。商店街というのは特徴として，人が徒歩でその中を歩き回りながら，ショッピングを行うということがある，人の顔が見られる，交流ができるような場所，それがこう線的に集まっているのが特徴的であると思っています。次に住宅についてですが，私たちの提案では，商店街を立て替えていきながら，低層部には商店，上層階には住宅を設けるような建て替えを考えているという提案をしていまして，これにより人々の日常生活に近い部分に商店を置き，住宅での機能を内側に入れていくということによって低地部での復興を考えています。

宇和島班：　宇和島班では，もともと地区の中心で

あった商店街を現在高齢者施設が多く，主に高齢者施設がより多くなっているという現状がありまして，一方で高齢者の方が中心に商店街に集まっているということがあり，高齢者の方々に何かしらの支援が必要だと考えられるので，そういったところに若者であったり，人々を入れていくことによって，特に復興時に支援が必要な人に対して手厚く支援が得きるような場所としての商店街を活用していこうという考えです。そういったことを考えて，現在商店街では上層階をはじめとして，空いている店舗が多く存在していますので，宇和島市の商店街については浸水域と非浸水域の境界が存在しているということなので，坂になっているところ，坂の上のほうでは上層階は浸水しないとなりますので，その上層階に住宅を入れていくような考えです。

井本：　ありがとうございます。

羽藤：　はい，ありがとうございました。では全先生いかがでしょうか。

全：　時間が限られているので手短に。まず全体的に復興だけじゃなくて，町全体を元気づけられるような，住民の方，あるいは観光客の方たちが楽しくできるような，そういった考えが結構出ていて，それは非常にいいなと思いました。後，一般的な暮らし，あるいは祭り，とかそういった人間関係，そういったものを意識されていて，従来のよくあるような，確立的なプロジェクトが結構多いですけど，こういった地元に入り込んでいろいろ提案する，何か独自性のあるものを見つけるというのは非常に面白いかなと思いました。特に，例えば西予市さんの気軽な DIY とか, 観光客には結構気まぐれな人が多く手ですね，私から見たら“それ本当に楽しいの？”と思うことをすごく楽しそうにやる人も多いので，そういったものも含めて今までにない視点だなと思って面白いと思いました。愛媛大の学生さん，日常と非日常をつなぐここにうまく産業だからこそしっかり考える必要があるというのはその通りかなと思いました。

それでは質問です。愛媛大の学生さんたちに聞きたいんですけど，最初に日常と非日常をつなげるというのがあったと思うんです。暮らし，避難，復旧，復興，暮らしと，そのあたりの日常と非日常をつなげるための取り組みとして，特にこういうことをやったらいいんじゃないのとか，こういった取り組みをやるとより事前復興としてよいんじゃないかとか，アイデアがありましたら一つお願いします。

愛媛大学：　アイデアというよりは実際にされていることがありまして，磯中学校の裏に避難路があるんですけどそこの清掃活動をみんなでやるということを一年に一回やっています。そういうことがこれからもつながっていけば，日常的に日常と非日常をつながるかなという風に思います。

全：　そうですよね，実際に地元の方はちゃんとこの辺りは問題なんじゃないかなとか，この辺りを楽しく地元を手入れする感覚で，でも，災害が起きたらそれが役に立つ，そういった取り組みを続けられたらいいなと聞いていて思いました。

羽藤：　はい，どうもありがとうございます。次は松村先生お願いします。

松村：　私は愛媛大学のほうの担当をしていました。学生たちは短い時間の中でよく考えてくれたなと思います。そしてそれにまして，事前復興という，そういう概念を一つの地域や地区に対して提案するというような，非常にチャレンジングなことに東京大学の学生も含めて，やってきたということは教員として誇れる成果かなと思いました。

そこでコメントです。普通の生活のときの計画に対してもう少し突っ込んでもよかったのかなというような感じはしました。年間計画というのはそこに暮らしている方々は一日でどういう風な暮らしをするのか，一週間でどのような暮らしをするのか，ひと月，半年，一年という形で周期性という物があると思うんですけどその周期性というようなものをこの地域に暮らしている方々の視点でもう一度検証しだすと，よりよくなったんじゃないかなという気はします。具体的に申し上げると，例えば小学校を合併するというような話があったと思うんですけど，じゃあそこに通学している子供たちはどうなのか，あとは最近ですと，宿泊型のコミュニティスクールということで地域に開かれているような傾向が強いと思うんですけど，じゃあそこの地域の方々が小学校に行って何かをお手伝いをする，読み聞かせをする，といったときに本当にそれがそこの小学校で高台のほうに行ってですね，堅実かどうかというよう

な観点なんかもあったらより現実味が沸いてくるなといったことで，まずはここからとすると，非常にいいスタートなんじゃないかなと思いました。

それでは質問です。佐田岬のところのグループ(伊方班）のほうで，途中のスライドでたくさん子供の風景が出てきたんですけども，そこに住まわれているような子供たちっていうのはどんな生活を送るんでしょうか小学校だったりとか，何か検討されているようであればよろしくお願いします。

伊方班：　ご質問ありがとうございます。実際に現地の調査にうかがったときに小学生にはちょっと会えなかったんですけど，たくさんの高校生や中学生に合うことができて旧三崎町の三崎というところで古三崎と呼ぶ方もいらっしゃるのですが，そのあたりの学生さんに会うことができて，どういう暮らしをしているのかをうかがったときに，もちろんバスなどで通学される方もいるし，自転車や，遠くから原付で通ってくる子もいるという話を聞いて，生活が一つの集落だけではなくて，広がっているということが現状としてあると思うんですね，広がっているということがこれまでだと，不便であるとか，そういったマイナスの面が目立っていたと思うんですけど，今回提案した中ではネットワークとしてとらえることができれば，もしかしたらより良い佐田岬全体という提案につなげていけるのではないのかなと話を聞いて思っておりました。お答えになっているかわかりませんが。

羽藤：　はいそれではフロアのほうから，コメントですとか質問とかを頂ければと思いますが，どなたかございますでしょうか。はい，ではそちら，どこの班に向かってかよろしくお願いします。

会場 A：　伊藤様，実際人手の面で，全先生がおっしゃられたようにお気楽な観光客もそりゃあおります。ヨーロッパを中心としたボランティア分布とありまして，私が行ったのはドイツとデンマークなんですけども，DIY で参加できるというのはいいアイデアだなとは思ったんですけど，どういったことからこのような発想を得られたのかなと思いまして，現場での実感と非常に合致するようなことですのでちょっとコメントいただけたらなと思います。

羽藤：　伊藤君お願いします

伊藤（西予班）：　現地に調査に行きまして印象的だったのは，空き家が多いていうことを町の中を歩いていて私たちは思いました。ただ空き家がある場所だって，だけじゃなくて，場所としても魅力があって，自分たちも滞在しに来たいなといったような感覚を持ちましたので，そういった感覚を共有するような人たちっていうのは全国的にも他にもたくさんいるだろうということで，そういった人たちを受け皿として，まず受け入れて，訪れてもらってそのまま素通りされるのではなくて，そういった人たちともう少し密接に内部に入り込んでもらえたらなということで，実際に空き家で，もしそれを好きに使っていいということであれば，もっと楽しいことがあるんじゃないのかなと思ってこの DIY というものにつながったという感じでした。

羽藤：　はいありがとうございます。ほかに，お願いいたします。

会場 B：　西予市の DIY の方になんですけど，空き家を活用した DIY ということで西予市としても空き家については避難所確保の問題となってきているんですけども，DIY による，活用なんですけども，一軒の家を活用するにはスパン的にはどれくらいを考えられているのかということと，完成した後の管理体制，どこが，だれが，といったようなことを考えられていたらお答えいただいたらと思います。

西予班：　修繕とかの具体的な期間とかスパンとかは考えていません，すみません管理者については現地管理していく，この DIY の活動をマネジメントしていくという人材についてはまず，地元の人たち，地域の方で運営していくことになるかなと思います。ただ，それが軌道に乗っていけば，興味を持ってくださった外部の方々たちとグループの方たちと運営していくようになるのかなというのが今回の提案の内容です。

羽藤：　はいありがとうございます。他いかがでしょうか。じゃあ，そちらの方で，次そちらのかた。

会場 C：　愛媛県庁に努めています尾崎といいます。私，愛南町出身なんで愛南班に質問したいんですが，まず，非常によく現地調査されていて，商店街と，

家串の事前復興計画についてしてくれて本当にありがとうございます。私実は今日のお話に合った，商店街の・・・昔は本当に，お寺にお参りする人とかで，本当ににぎやかだったんですけど，今はもう，役場も外側に行って内側がどんどんどんどん寂しくなっているので，今日の提案みたいに，また再びにぎやかになってくれればいいなと思います。事前復興を抜きにして，街づくりの一つの提案として，すごくいいお話だと思ったのですけど，災害があった後の復興で商店街を山のほうに建て替えるという話があったと思うんですけど。住んでいて商店街に合う場所なんてないんじゃないかなと，実際どこを想定しているのかなと，そこをちょっと思いました。

愛南町班：　ご質問とコメントありがとうございます。商店街を仮設で作るという話なんですけど，商店街を立て替えるといっても元々の素晴らしい商店街に戻すという，あくまで仮設でのちょっとした店舗，コンテナであったり，プレハブなどでの商店街を想定しています。場所としては記憶が正しいかかわからいですけど，お寺のすぐ前に駐車場があったと思います。駐車場が結構横に長くあるので，そちらにプレハブのようなものを立てて，それができるだけ早くしたら，元の商店街を作れるようにという風に簡易的な商店街として考えています。

羽藤：　ありがとうございました。じゃあ最後。

会場 D：　西予市の三好と申します。よろしくお願いします。南海トラフ事前復興に向けたということで，私は西予市に住んでいて，南海トラフの震度の M9 くらいのが来たら，伊方原発に被害が起きるということで（？），伊方原発の対策が発表されるかなと思ってワクワクしてきました。割とそういったものがなくて，寂しいんですけれど，7 月豪雨災害を教訓にということなんですが，福島原発の災害を教訓にと考えなかったのかということと，西予市とか南予地方に原発があるんですが，この辺に実家などがあれば，このあたりに住みたいと思われますか。それをお聞かせください。

羽藤：　前半のほうの質問についてはですね，この取り組み，愛媛大学と東京大学でやっているんですけども，福島の南相馬というところで，私共，復興の支援の活動をやっておりますが，非常に長期期間問うことを余儀なくされている中で，どうやってその地域の関心を持ち続けていただくのか，あるいは，その地域から，離れざるを得ないという人たちも出てきてくるため，地域の分断といったような問題も起きています。こういった問題は，おそらく南海トラフの想定を強くした場合に，震災の強度を強く想定した場合には，当然考えていくべき問題だと思いますが，今回については原発の被害というものは想定せず，まず津波というところに焦点を当てた，事前復興の計画というところにとどまっているのかなと思います。ただ，今後ですね，そういったことも当然考えていくべき重要な課題だという風にあらかじめ学生さんとこういった議論の時，そういった場合も想定されるという話もしてありますし，メンバーの中ではそういった議論もしているというのが実情ということになります。

後半のほうの質問については，なにか。答えるのは難しいかな。住みたいか住みたくないかという質問なので誰でもどうぞ。率直な意見を。

伊方班：　ご質問ありがとうございます。住みたいか住みたくないかで言うととても住みたいのですが，住んでいくのが現状としてあるかなというのはもちろんわかっていて，それをどのように解決していけばよいのかをもう少し日常の面からも考えられたら良いのかなとは考えています。

愛媛県（防災局長）：　原発についてちょっと，皆さんのご理解もかねて説明させていただきたいんですけど，確かに原発があることは絶対に安全とは言い切れないんで，できるだけ，よい安全計画や防災計画を作っているんですけど，南海トラフ地震に限って言いますと。

まず，南海トラフの津波はいまの想定では，原発は瀬戸内海側にあるので，震度に関してはですね，今原発は 1000gal に耐えうる設計にしているので南海トラフ地震の震度では大丈夫です。

次にその津波なんですけど，津波については福島第二波の津波にやられて電源が全部ストップして，というような状況になったんですけども，まず南海トラフの津波は瀬戸内海側では 2m ぐらいです。太平洋側では 8m になるんですけど，ずっと回ってきますので 2m 程度です。原発は 10m くらいの高さにあるので津波は来ません。大丈夫です。ということ

で，南海トラフがあっても伊方原発は大丈夫と，いうことでご理解いただきたいです。南海トラフ地震よりもむしろ，中央構造線が壊れた時のほうが 8m くらいの津波が来ますが,それも伊方原発は 10m ということで大丈夫なんです。ただし，何が起こるのかわかりませんので，知事が四国電力に強く言いまして，電源を変電所から引くとかですかね，こちらのほうでもすごく準備しています。

ただ，一番最初に申し上げもしたように絶対に安全ということはないので，万一の時に備えて避難計画を立てて，なんか起きた時には速やかに避難できるように住民の方とは努力しますので，ご理解ください。

羽藤：　ありがとうございました。以上で終わりたいと思いますけども，事前復興という言葉についてなかなか馴染みが薄く，わかりがたかった，あるいは南海トラフということそのものもどちらかというと愛媛は安全なところという認識もあってですね，関心か薄いのではないか，と思っておりましたところ，西日本豪雨というものがおきまして，そういったことに直面してですね，なかなかボランティアの方も相当助けに入られたと思うんですけど，なかなか進まないという中で，太刀打ちできないと思っていた方も多いのではないかなと思います。そういったことに対して，今回学生さんが非常に膨大な時間を使って現地を歩いて，中ではいろいろ議論していく中でけんかもあったり，激しい議論もあったりするなかでこういう提案をしていただいたということになります。

今後はこうした，すごく小さな計画だとは思いますが，これを一つの種にして，また地元の方と議論を進めながら，事前に何ができるのかという何かアクションにつなげていければと思いますので，何卒宜しくお願いいたします。

それでは学生さんと，質疑をしてくださった方々に拍手をもって終わらせていただきます。